

東京家政学院大学紀要 第四四号 二〇〇四年 人文・社会科学系 抜刷

(二〇〇四年八月発行)

環境と倫理

鈴木 元久

環境と倫理

鈴木 元久

はじめに

ひとは人間から生まれ、人間との関わり合いの中で人間となる。人間との関わりをより善く営み、人間としてより善く生きるために、倫理がある。しかし人間も他の動物や植物と同様に一つの生きるものである。人間は人間と共に生き、さまざまな物を作ってきた、また他の生きるもの（自然）を利用しつつ、自然と共に生きてきた。そこに環境がある。人間は自己の感覚や思维能力の及ぶ限り、人間を中心に円を描く。その円によって閉じ込められた内部を人間の生きる「環境（environment）」としてきた。^①しかし現代の先進諸国の環境は、拡大するとともに、縮小化している。つまり科学技術や政治・経済などの文化的営みにより、人間の知的環境は広がりを見せるが、その生活環境は、次第に人間のみが生活する世界となりつつある。より具体的に言えば、科学技術の産業化、経済機構の肥大化・複雑化などにより、知的環境はマクロ的にもミクロ的にもその境界は拡大されたが、技術により製作された人工物に囲まれた、閉ざされた生活環境へと変化してきている。そこに今日の環境問題が問われているのではなからうか。

その問題の多くは、エネルギー消費の拡大に伴う環境破壊、すなわち異常気象・地球温暖化・熱帯雨林の破壊・酸性雨などの自然破壊の問題である。このような問題は、自然そのものがもたらしたのではなく、人間の営みにより生じた問題である。人間の文化・歴史は、物を製作し、それを販売し利潤を得ることにより、人間の欲求の充足、つまり便利で快適な生活―人間の幸福を得るために営まれてきたと言ってもよいであろう。その営みの中で環境は、自然的環境から人為的環境へと変化し、その変化によりさまざまな問題が問われ、解決を迫られている。そこであらためて人間と自然（環境）との関わりを考えてみたい。人間の営みの一つである学問、特に哲学（形而上学）と自然科学（科学技術）との関わりについて再考する必要性があるのではなからうか。そこで古代ギリシャの代表的な哲学者の一人であるアリストテレス（Aristoteles, 385/4 ~ 322 B.C.）を中心として古代ギリシャの思想を基に、今日の問題の本質を考えてみたい。何故なら、古代ギリシャ哲学こそ、現代文明の基礎の一つと考えられるからである。また、現代の野生生物生態学者であるアルド・レオポルド（Aldo Leopold, 1887 ~ 1948）の「土地倫理（Landethic）」を手引きとしながら、

環境と倫理について考えてみたい。そこから対人間および対自然との新たな倫理が問い直されなければならないであろう。

哲学と自然学

今日の環境の諸問題を考え、その解決の糸口を見出すためには、まず人間の知のありようについての再吟味が不可欠であろう。何故なら、この問題の最大の原因の一つには、その根底において人間の知が深く関わっていると考えられるからである。すなわち人間の知が環境（自然）と関わることによると考えられる。西洋の諸学問の基礎は古代ギリシヤにまで遡ることができると言われている。そこでアリストテレスの知に対する考え方を、次に学に対する考えをその主著の一つである『形而上学』を中心に見てみよう。

最初に、常人共通の感覚を超えて、或るなんらかの技術を発明した者が、世の人々から驚嘆されたのも当然である。それも、ただたんにその発明したもののうちになにか実生活に有用なものがあるからというだけではなくて、むしろそれを発明したほどの者は知恵のある者であり、他の人々とはちがつて遥かに優れたものであるからという理由で、驚嘆されたのである。だが、さらにいろいろの技術が発明されてゆき、そしてその或るものは実生活の必要のためのものであり、他の或るものは安楽な暮らしに関するものであるが、これらの場合にもいつでもひとは、この娯乐的な術の発明者の方を、前者のそれよりも、その認識がなんらかの実際的効用をもねらっていないからという理由で、いっそう多くの知恵ある者だと考えた。

そこからさらに、すでにこうした諸技術がすべてひととおり備わったとき、ここに、快楽を目ざしてでもないがしかし生活の必要のためのでもないところの認識（諸学）が見いだされた、しかも最も早くそうした暇な生活を始めた人々の地方において最初に^②。

人間も生物の一種である限り、身体的生命を維持しなければならぬ。そこで人間はまずその生活を営むため、つまり（1）「実生活の必要のための」知（技術）―「生活術」が求められ、その実生活が整うとき、（2）「安楽な暮らしに関する」知、即ち「娯乐的な術」が生まれてくる。そしてこのような技術が整い、生活に余裕ができる時、（3）「快楽を目ざしてでもないがしかし生活の必要のためでもない」ところの知（認識）が見出される。このようにアリストテレスは知のあり方の優劣を「実際的効用性」―「実用性」に求める。つまり「その学それ自らのゆえに望ましくまたその知ること自らのゆえに望ましい学の方が、そのもたらす効果のゆえに望ましい学よりもいっそう多く知恵であり^③」、実際的効果をもたらすことの少ない知の方が、より優れた知恵であると考える。このような知に対する考えは、今日の学問に通ずるものがある。現代においても生活苦に喘ぐ人々の多くは、理論的な知より、今日食するものなどに実用性のその知が向うことはよく目にするところである。安定した快適な生活を得たときには、多くの人々は生活を離れ、純粹に真実な知を追い求める。

では次にアリストテレスは学問―本来の第一の学問をどのように考えていたのだろうか。アリストテレスは学問（episteme）を（1）「理論学（theoretike）」（2）「実践学（praktike）」（3）「制作学」の3つに分類し、理論学には①「神学（theologike）」（彼は「第一

哲学 [proté philosophia]」とも呼び、後に「形而上学」と名づけられた^②。「自然学 (physike)」(第二哲学 (deutera phil.))^③「数学 (matematike)」^④、実践学には「倫理学」・「政治学」・「経済学」が属する。制作学は「詩学」である^④。

ではアリストテレスは哲学と自然学をどのように考えていたのだろうか。アリストテレスによれば、「存在を存在として (to on he on) 研究し、またこれに自体的に属するものどもをも研究する一つの学 (episteme tis)」が哲学であり、自然学は「存在を存在として一般的に考察しないで、ただそれのある部分を抽出し、これについてこれに付帯する属性を研究している」^⑤。このように両学の差異性およびその関係性は、「自体的に (kata hautou)」―「付帯的に (kata symbekelos)」―「全体」と「部分」に存する。具体的に言えば、自然学は存在そのもの、すなわち存在の本質ではなく、存在するものの一部を、それに付帯する属性を研究するものである。自然学は「現に〔他の諸学と同様に〕或る特定の類の存在を対象としている、すなわち、この学はその運動や静止の原理〔始動因〕をそれ自らのうちに含んでいるようなそのような種類の実体〔すなわち自然を原理とする自然的存在〕を対象としている」^⑦。このように自然学は、存在するものの中からその一部を取り出し、その原理・原因を研究する学であり、存在するものそのもの―存在するもの全体の学ではない。つまり自然学は環境―自然―世界の全体がいかにあるか、その中でわれわれはいかに生き、いかに行動すべきかは問わない。

今日、自然学―自然科学は多くの領域に分化され、また分化された専門領域は融合がなされ、学の複雑化・細分化は留まることはない。今日の自然科学は極めて限られ閉ざされた領域を形成している。そし

技術化された自然科学の成果が今日のわれわれの生活を豊かに、快適に、便利にしている。さらに技術化された科学は、科学技術として産業化・経済化されることにより、社会を豊かにした。それはわれわれの生き方・在り方に、また環境―自然―世界の本質の捉え方に大きな影響を与えている。このような現実に対し、藤沢令夫氏は、次のように述べている。自然(環境・世界)の一部を特定の対象として全体から抽出することによって、その構造や仕組みの解明は、自然(環境)の仕組みを人為的にいじることを、また新しい物を人為的に作り出すことを可能にする。しかし元来その抽出された部分としての対象は、世界全体との関係においてのみ意味をもつのであって、その対象の仕組みをいじることは、必ず世界全体の意味と価値のシステムに影響すると指摘している^⑧。さらに「部分的認識としての科学・技術がもたらす思わざるマイナスの波及効果……に対してふたたび部分的認識にもとづく技術的対策によって対処しても、その対策自体が他の局面でも“思わざる”害悪をもたらす危険が多いにあります^⑨」と述べ、現代の諸問題に警告を発している。自然の一部を抽出し、その一断面についての知見から得られた効果が、その負の効果をも合わせ持つことは、十分に自覚されているところである。しかしその解決法として同一のレベルでの対策がとられるなら、予期せぬ害悪を招くことはあまり意識されていない。そこで自然全体を、世界全体を眺める学が、アリストテレスの言葉を借りるなら、先に引用した「快樂を目ざしてのでもないがしかし生活の必要のためでないもないところの認識〔諸学〕」が、「ただ知ることそれ自らのゆえに知り、ただ認識せんがために認識する」^⑩することが必要となろう。

自然と自然学

古代のギリシャ人たちは、自然をどのように考えていたのであろうか。アリストテレスの言葉を手がかりに考えてみる。

あの最初の哲学した人々のうち、その大部分は、質料の意味でのそれのみをすべての事物のもとのもの〔原理〕であると考えた。すなわち、すべての存在のそのように存在するのは、それからであり、それらすべてはそれから生成し来り、その終わりにはまたそれにまで消滅し行くところのそれ（ここではその実体はそのままそれらすべての基に〔基体として〕止まり、ただその受動態〔属性・様態〕にのみその転化すなわちその消滅変化が現われる。）こうしたそれを、かれらは、すべての存在の構成要素〔元素〕であり、もとのもの〔原理〕であるといっている。それゆえに、かれらの考えでは、なにものも〔それ自らは〕生成することもなく絶滅することもない、⁽¹⁾といふのは、その自然は常に自らの持前を保っているからである。

古代ギリシャの自然学者と呼ばれた人たちの多くは、自然の基に在るもの、すなわち万物の原理 (arche) を、「水」、「土・アペイロン（無限なもの）」、「空気」、「火」、「四元素」、「種子」などと考えた。自然（的事物）は「それから生成し」、「それにまで消滅し行く」ものであり、つまり自然はアルケーから生まれアルケーへと消滅するものである。しかしそのアルケーそのものは生成消滅しない。このように彼らは不変不動のアルケーと絶えず円環的に生成消滅―変化を繰返すも

のの在りようこそ、自然と考えた。このような素朴な考え方を古く幼稚で意味なきものと切り捨てることができようか。現代人のわれわれから見ても、水は雨として地上に降り、河となり、海に注ぎ、水蒸気となつて、空に帰り、雨となり再び帰つて来る。空気も地球の上を風となり駆け巡り、眼には見えないが、その姿を変え、絶えずわれわれの生命の源である。もちろん、われわれは水も空気も無限に存在するとは思えない。物質としての水や空気は、限られたものにすぎないことをわれわれは知っている。しかし常に繰返す―循環する仕組みそのものこそ、自然の持前―自然の本来的あり方 (physis) ではなからうか。これを彼らは、万物のアルケーと捉えたのではなからうか。自然（環境）を考える際に、このことは忘れてはならないであろう。

では次にアリストテレスの自然の捉え方を見てみよう。『自然学』の第二章に次のような句を見ることができる。「ある」と言われるものの〔諸存在〕のうち、その或るものは自然によって存在し、他の或るものはその他の原因によって存在する。自然によって存在するものども（自然的諸存在、自然物）は動物とその諸部分や植物や単純な物体、たとえば土、火、空気、水などである。……これら〔自然的に存在するものども〕の各々はそれ自らのうちにその運動および停止の原理〔始動因〕をもっている。……これに反して、寝台や衣やその他この類のなにものであろうとも、技術によつて存在するものとしてのかぎりのすべては、それ自らのうちに転化へのならかの衝動をも植えつけられていない⁽²⁾」アリストテレスによれば、存在するものは、①自然によつて存在するもの (to phusei on, 自然的諸存在、自然物) か、②技術によつて存在するものである。前者は動植物や土、火、空気、水などの物体であり、自分自身の中に運動および停止の原理〔始動因〕

を、また成長や性質の変化の原理をもっているものである。後者は寝台や衣などのような製作品・人工物であり、自分の中に運動の原理をもたないものである。その存在の原理はそれを制作する人の中にある。アリストテレスの言うところの「自然」とは、「それ自らのうちにその運動・転化の原理をもつところのものども〔自然物〕の各々の基体であるところの第一の〔最も直接の〕質料を意味する。(2) 他の仕方では、自然はそのもの〔自然物〕の型式であり、その説明方式における形相である」つまり自然とは、自然物の①「質料」であり、②「形相」である。比喩的に言えば、水は「水素」と「酸素」からなり、2個の水素と1個の酸素が結び付くところに存在する。その素材として水素と酸素が質料であり、2個の水素と1個の酸素の組み合わせ方、すなわちその型式が形相と言えるであろう。

自然界にはさまざまな質料―構成要素が存在し、自然の原理によって生成変化を繰返している。たとえば、空気は窒素や酸素や二酸化炭素などにより構成されている。人間は空気(酸素)を体内に取り入れ、二酸化炭素を排出することにより生きることができる。二酸化炭素は植物やその他の自然により酸素に変換される。このように自然の循環は自然自らによって保たれている。しかし人間は自然によって存在するもの―自然物を分解したり結合したりして、すなわち自然の仕組みを再構成することにより、人工物―新たなものを作り出す。人工物が大量に生産され、消費されると、そこに大きな問題が生じる。たとえば、人間の技術により作り出された塩素化合物(フロン)によりオゾン層が破壊されつつある。すると「自然によって存在するもの」と「技術によって存在するもの」との共存の仕方が今や問われている。そこですなわち、「自然」と「技術」の関係が問題となるのである。そこで

次にアリストテレスの自然と技術と関係性を見てみよう。

自然と技術

『自然学』の第八章に次のような言葉を見ることができる。この章でアリストテレスは自然の合目的性について論じている。アリストテレスは自然によって存在するものには「そのためにあるそれ」としての原因Ⅱ目的因の存することを主張する。

たとえば、もし家が自然によって生成するものの部に属するとすれば、それはあたかもそれが現にいま技術によってあるように、そのように生成するであろう。そして、もし自然によっての事物が、ただに自然によってのみならず、技術によっても生成するとすれば、それらは、それらが自然的にあるのと同じような仕方でも生成するであろう。だから、「こうした生成過程において」先のものは後のもののためにである。ところで、一般に、技術は、一方では、自然がなしとげえないところの物事を完成させ、他方では、自然のなすところを模倣する。そこで、もし技術に従ってできた物事がなにかのためにであるとすれば、明らかに、自然に従ってできた物事もまたそうである。なぜなら、技術に従ってできたものにおいても、自然に従ってできたものにおいても、先のものと後のものとの相互の関係は同じであるから。¹⁴⁾

自然によって成るものも、技術によって成るものも同じように成ると、アリストテレスは言う。このように自然と技術の在り方は同一で

あろうと言う。そして技術の在り方は自然によって成し遂げられないことを完成させ、自然を模倣するとも言う。もちろんこのことは古代と現代では諸事情が異なっているから、そのまま受け入れることはできないにしても、現代のわれわれにとり、示唆多きことではなからうか。現代に生きるわれわれはこのことをどのように考えればよいのであろうか。現代の実例に沿って考えてみよう。現代の環境問題の要因の一つに考えられる「人口増加」がある。自然には人間やその他の生物を収容しきれる能力には限界がある。自然（人間もその一部である）がその限界を超えるとき、すなわち自然の原理に反するとき、自然（環境）にさまざまな不具合——食糧問題、エネルギー問題など——が生じ、自然（環境）に関するさまざまな問題が生じる。自然が反自然的になること（自然的にか、もしくは技術的（人為的）か）を矯正するところに、すなわち本来の自然の目的に方向を修正するところに、技術は自然が成し遂げられないことを完成するという意味があるのでではなからうか。すなわち、ここに技術の本来の在り方があると考えられないであらうか。それゆえ技術は自然を模倣して、自然の原理に従い、自然の目的に向うところに、技術の本質があると考えすることに無理があるであらうか。このような観点にたてば、現代の環境問題の解決法の基盤としての自然と科学技術の関わり方を模索することができのではなからうか。先に述べたように自然科学は自然の一部を抽出したところに成り立つ学であり、科学技術もまた同様である。両者と哲学（倫理学）との繋がりが重要とならう。つまり自然全体を、環境全体を眺め、自然の仕組み全体の在り方を探り、その在り方に沿い、自然科学を、科学技術を導いて行くことが現代において必要ではなからうか。

するとここに全体（自然）と部分（自然学や技術）の問題を考えなければならぬ。そこでアリストテレスの次の言葉に注目したい。『政治学』第一巻第二章において、「自然は、……何ものをも徒らに作りはしない（*outhen maten he physis poei*）」¹⁵という句を見ることが出来る。これは「人間は自然に国的動物である」ということを明らかにすることとの関連で述べられたものであり、彼の合目的な考えを主張するものである。自然は或る目的（善・最高善）に向けて存在するものであるからして、自然そのものには無駄なもの、無意味なものはない。しかし人間の立場から見れば無駄なもの、不必要なものは沢山あるであらう。人間は、自然における人間にとり無駄なものを人間にとつて有益なものにしようとする。ここに人間文明の一つである科学技術の在り方がある。ここに自然（全体）と科学技術（部分）の摩擦——問題が生じる。しかしアリストテレスは同じ『政治学』の中で次のように言う。「自然には「本性上は」、国は家やわれわれ個々人より先にある、何故なら全体は部分より先にあるのが必然だからである。例えば全体としての身体が壊されると、人が石の手を手と言う場合のように、同名異義的に言うのならともかく、そうでなければ、手も足もないであらう」¹⁶しかし人間の歴史は、全体（国家）から部分（個人）へとその力点が移行する歴史である。「国が自然にあるということも、また（自然には）各個人より先にあるということも明らかである」¹⁷というアリストテレスの立場は勿論時代的制約の上にある言葉であり、種々の問題もあるが、しかし自然環境の問題を考えると、全体——部分という視点は必要かと思われる。すなわち、いづれかに偏る視点ではなく、全体に基づく部分、部分に基づく全体という観点がそこになければならないのではなからうか。

さらに同第八章に「植物は食糧として彼らのために存し、他の動物は人間のために存し、そのうち家畜は使用や食糧のために、野獣はその凡てでなくとも、大部分が食糧のために、またその他の補給のために、すなわち衣服やその他の道具がそれから得られるために存するのである。だから、もし自然が何ものをも不足なものとして作ることもなければ、また徒らに作ることもないならば、人間のためにそれら凡てを自然が作ってくれているのでなくてはならぬ¹⁸⁾」とアリストテレスは言う。つまり自然はその目標に向け、自然の成員それぞれに過不足なく、また無駄に生命・生活の糧を作らない。今日の言葉で言えば、食物連鎖という機構が自然には備わっている。しかし人間は食糧やその他のものを絶えず「不足」と見なし、自然が与えてくれたものを「過度に」、「いたずらに」利用する。人間は「自然」と「人為（科学技術）」という関係をもう一度見直してみる必要があるのではなからうか。

土地倫理

野生生物生態学者、環境倫理学者であるアルド・レオポルドは『野生のうたがきこえる』(A Sand Country Almanac)において「土地倫理」を提唱した。そこで彼の新しい現代の倫理を見ることにより、自然・環境について考えてみよう。

レオポルドの意味する「土地倫理」とは、人間共同体における倫理から、土壌、水、植物、動物、つまり「土地」―「自然」をも含む其同体の倫理を言う¹⁹⁾。人間は人間だけでは生きられない。地、水、火、風、動植物とともにしか、つまり自然の中でしか生きられない。しかし人間は道具を作り、動力を見出し、機械を作り、人間の生きる術を

作りだした。すると人間が作ったものによつてのみ生きていると考えようになった。しかし人間は人間以外のものは作ることはできない。ただ自然に加工を加え、生活環境を作っているだけである。しかし自然の過度の利用・使用による自然不在の人間環境(例としては都市化、機械化など)は、人間不在の環境を作り出すことになる。つまり「土地倫理は、ヒトという種の役割を、土地という共同体の征服者から、単なる一構成員、一市民へと変えるのである。これは、仲間の構成員に対する尊敬の念の表れであると同時に、自分の所属している共同体への尊敬の念の表れでもある²⁰⁾」レオポルドの土地倫理とは、人間は自然の支配者・征服者ではなく、人間も自然の一部・一員であることを自覚することである。

現代にとつての自然は、単に人間(個人・社会〔企業・国家〕)にとりその利用価値が認められる時のみ、その存在価値が認められる²¹⁾。即ち自然が保養地(温泉地等)、行楽地(ゴルフ場・スキー場等)として見られるときにのみ、その存在価値が意識される。普段の都市生活の中では、その存在は人間に忘れ去られる。人工物にのみ囲まれた都市生活の中では、自然を意識せず、人間も自然の一員であることを忘れる。水・食糧・空気など自然の提供するものがあたかも人間が自ら作り出した如き錯覚を以て生活している。例えば、人間は自分の環境内にある家族や自分と関わりのある人や物には関心を持つが、自分の環境外の人や物には無関心である。諸外国の災害や事故や飢餓などには、さして関心を示さない。しかし自分や家族や知人の生死や幸不幸に関わりのあることには、意識を研ぎ澄まし、強い関心を示す。つまり自然が、自己の利益との関わりにおいてのみ(自然の脅威等に曝される時)、換言すれば、自分の意識内・環境内の存在と自覚される

ときにのみ、自然の存在の価値を知る。

そこでレオポルドは言う、「人間の自分勝手な経済的観点だけに基づいた自然保護体制は、どうしようなく偏ったものである。これでは、土地という共同体のなかの、人間の商売に役にはたさないが（われわれ人間の知る限りでも）その共同体の健全な機能に欠くことのできないと思われる数多くの要素をないがしろにし、ひいては絶滅させてしまう結果になる」²²⁾確かに科学技術の産業化、経済化は自然物を利用して生活物質を大量に生産し、利益を生み蓄え、一部の人間を貧困から救い、不平等を是正した。しかしこれですべての問題が解決したわけではない。政治問題・経済問題・倫理の問題は依然として未解決のものが山積している。とりわけ環境問題は人類の生命の存続という危機的状况を呈している。そこに環境と倫理の問題の解決が急務であるが、それは他の諸問題との絡みにより遅々として解決策が見出されない。そこで人間と自然との共生・持続可能な発展・自然保護が叫ばれる。レオポルドはいう、自然保護とは「人間と土地とのあいだに調和が保たれた状態のことである」²³⁾さらに言う、「土地倫理とは、生態系に対する良心の存在の表れであり、これはまた、土地の健康に対しての個人個人に責任があるという確信をも示している。健康とは、土地が自己再生をする能力を備えていることである。自然保護とは、この能力を理解し保存しようとするわれわれ人間の努力のことである」²⁴⁾と。

人間の生命は、自然と同様に自己再生・回復能力を持つ。医療技術・衛生管理の未熟な時代は、その能力に頼る以外に生命を維持・保持する方法を持たなかった。しかし現代、科学技術・医療技術の発達、公衆衛生の向上により、人間は自分が病気に罹れば、健康回復を望み、そのための様々な手段を採る。またそれが生死に関わることであれば、

必死にその生命を維持しようとする。人間の歴史、文化の発展とは人間の生命の維持・保持と言っても過言ではない。しかし自然は自己再生能力は持つものの、それには限界がある。人間の肉体を過剰に酷使すれば、病にもなり、また死に至ることもある。自然も同様である。人間による自然の異常な酷使は自然の疾病―死をもたらす。今日、人間は人類の平和と幸福を願うことと同様、自然の健康と幸福を願う必要に迫られている。人間は、かつて自然から様々なものを学び、自然から様々なものを贈られてきた。いまや、我々人間は、自然の一員である人間の本来のなかり方を知り、自然にその返礼をしなければならぬ時と言えるであろう。人間は人間のために自然保護を行なうのではなく、人間を含む自然の健康と幸福のために人間と自然の病を癒さなければならない。これが本来の意味の自然保護と言えるであろう。それは「自然との共生への責任」とも、生きし生けるものへの「慈悲」とも言える。自然は恵みであると同時に脅威でもある。このような自然に対する愛着と畏敬の念はかつて人間は絶えず持っていた。しかし現代、我々は人間の能力を過信し、それを忘れ去ってしまった。今こそ、我々人間が思い出さなければならぬ時であると言えよう。このように倫理を拡大・拡張することこそ、現代の倫理と言い得るであろう。最後に彼の言葉を挙げる。

倫理観の進歩に役立つように打っておくべき「奥の手」は、一言で言えばこうだ――適切な土地利用のあり方を単なる経済的な問題としてとらえる考え方を捨てることである。ひとつひとつの問題点を経済的に好都合かという観点ばかりから見ず、倫理的、美的観点から見ても妥当であるかどうかを調べてみることだ。物事は、生物

共同体の全体性、安定性、美観を保つものであれば妥当だし、そうでない場合は間違っているだ、と考えることである⁽²⁵⁾」

自然に対する人間の態度のあるべき姿は、自然を個人の利益、国家の利益、人間の利益という視点でのみ考えるのではなく、つまり経済的観点からばかりでなく、倫理的・美学的に捉え、自然のシステムの全体性・安定性・美観性を保持するものを是とすることである。すなわち、自然の利用するには、①時間をかける―急がない、②頭を使い変化を予測する、③自然の利用のための技術を磨く、④自然に対する愛情をもつことが大切であり、決して投資した資金の多寡ではなく、自然に対し人間は理性を働かせた分、また愛情を注いだ分、自然もそれに応じてくれると言う⁽²⁶⁾。

おわりに

人間は勿論、動物も植物も自然であり、生命を有するものである。アリストテレスの言葉を借りるなら、自ら運動し生成し変化するものである。しかし現代人のわれわれの眼から見ると、古代人が万物のアルケーと考えた水や空気や土や火などは、生命あるものとは考えにくい、これらのものもまた自然である。われわれ人間は自然を利用することによって、生きてきた、否、自然よって生かされてきたと言っても過言ではあるまい。そのような自覚に目覚め、われわれは自然と共に生きる、自然を保護することが、今日叫ばれている。それは、われわれには、「自然により生かされ―自然を生かす」という視点の必要性を意味するのではなからうか。自然（人間を含む）はいか

に生きようとしているのか、どこに行こうとしているのか、何なのか、ということが改めて問われなければならないまい。人間にとっての自然のみを環境と見るのではなく、一切の自然物（人間を含む）による共同体を環境としなければならないのではなからうか。人間は人間の幸福を求めて続けてきたが、今や人間の幸福のみならず、自然（環境）全体の幸福を見つけないならならぬのではなからうか。牛や馬には馬や牛の、花には花の、魚には魚の、空気には空気の、水には水の幸福―善があるはずである。自分だけの幸福を得ることを善とする人はいないであろう。自分の幸福を、家族の幸福を、そして社会の幸福を実現することが善であろう。さらに進んで、自然全体・環境全体の幸福を求めることが、今や必要ではなからうか。それは愛によって作り出される。何故なら、「生を共にする (syzen)」ことこそ、愛 (philia) の特性であるから⁽²⁸⁾。そこで人間の知恵―学問は、再び自然の声に耳を傾けることが必要であろう。しかし機械化し、都市化し、技術化した今の生活環境には、自然の声はあまりにも小さく、遠い。人間の欲望はあまりにも大きく、多く、強い。われわれは今日の便利で快適で豊かな生活を変え、放棄することはできない、自然の利用者・支配者・統治者のままであり続けることを願うであろう。しかし『旧約聖書』の言うように、人間が自然の支配者、統治者であるとしても、自然の統治者として自然全体の幸福の実現に向け、その統治をしなければならぬのではなからうか。そこで人間は人間の知恵 (sophia) を問い、その学そのもの―自然科学も、経済学・政治学も、その他すべての学―が、つまり学問の本質が、問い直されることが求められているのではなからうか。二一世紀の現代に生きるわれわれは、経済・政治・自然科学・医学など諸科学の発展のみならず、自然（環境）と人間と

の間を繋ぐ倫理を模索し、構築する必要性があるのではなからうか。そのような環境（自然）と倫理の理解・認識を基に自然と言う共同体の一員としての人間の発展があるのではなからうか。

注

- (1) 「環境」とは、言語的に見てみると、「環」とは名詞的としては「◎型の輪の形をした玉」で、腕輪や指輪などに用い、転じて広く、輪の形をした物を意味する。動詞としては、「めぐる」「まわる」「○型にとりまぐ」「かこむ」という意味をもつ。そして「境」は「さかい」「土地の区切り目」「物のさかいめ」「一定の範囲の場所」「地域」「人や物の置かれている、周りの状態・地位」の意味である。（『漢字源』）また environ は「取巻く」「包囲する」という意味をもち、語源的には古フランス語 environer (en 中に + viron 円 + 動詞語尾) に由来し、「円の中に入れる」という意味をもち、単なる物理的環境—surroundings とは異なる人の感情・ものの見方に影響を与えるものである。（『プログレッシブ英和中辞典』）つまり「環境」とは「丸く取り囲まれた場所・領域」という意味であらう。

- (2) 『形而上学』1-1 981b（日本語訳はアリストテレス全集 12 出降訳『形而上学』岩波書店、1968 によろ。）
 (3) 『形而上学』1-2 982a
 (4) 『形而上学』6-1. 『ニコマコス倫理学』6-3 ～ 5
 (5) 『形而上学』4-1 1003a
 (6) 『形而上学』4-1 1003a. 第一哲学（形而上学）は存在としての存在の原理や原因の探求であるが、自然学は「それぞれ或る特定の存在や或る特定の類を抜き出してこうした存在の研究に専念しているが、しかし（一）存在を端的に、すなわち存在をただ存在として研究するのではなく、また（二）その研究対

象のなにであるか（本質）についてはなんの説明もしないで、かえってこれから出発している」『形而上学』6-1 1025b

- (7) 『形而上学』6-1 1025b
 (8) 藤沢令夫『ギリシャ哲学と現代』岩波書店、1984 p71
 (9) 同 p72-3
 (10) 『形而上学』1-2 982a-982b
 (11) 『形而上学』1-3 983b
 (12) 『自然学』2-1 192b（日本語訳はアリストテレス全集 3 出・岩崎訳『自然学』岩波書店、1976 によろ。）
 (13) 『自然学』2-1 193a
 (14) 『自然学』2-8 199a
 (15) 『政治学』1-2 1253a（日本語訳はアリストテレス全集 15 山本光雄訳『政治学』岩波書店、1977 によろ。）
 (16) 『政治学』1-2 1225a
 (17) 『政治学』1-2 1225a
 (18) 『政治学』1-8 1256b
 (19) アルド・レオポルド／新島義昭訳『野生の歌が聞こえる』講談社、1997 p318
 (20) 同 p319
 (21) 「現実の世界では、数多くの仲介者や無数の道具のおかげで、根っからの現代人は土地から隔たれてしまっているのである。人間は土地と血の通った関係を持たなくなってしまった。たいていの人には、土地とは都市と都市とのあいだにある、作物の育つ空間にすぎない。一日自由に土地の上でくつろがせてみても、ゴルフ場とか「景勝」の地でもない限り、たいていの人はたちまち退屈してしまう。そういう人は、ふつうの農法の作物より水栽培の作物

のほうで、きつと性によく合うだろう。木、皮、羊毛、その他の土地から得られる天然の産物よりも、見かけだけ似ている人造品のほうがしつくりくるに相違ない」p347-8

(22) 同 p332

(24) 同 p343

(25) 同 p349

(26) 同 p350

(27) 『政治学』2-9 1280b に「完全で自足的な生活のために家族や氏族が善き生活において共同する時、初めて国が存するのである。……、国のうちに親類団体や胞族団体や祭祀団体や社交団体が生じたのである。そしてかようなものは愛の働きによって作り出されたものである、というのは共に生きることを選択するのは愛であるから」とある。人間と自然との共同体を一つの国と考えるなら、両者の善き生活、幸福を求めて共同する時、真の意味の共生があるのではなからうか。それは愛の働きが必要であり、人間は自然の愛により生かされてきたが、今や、愛が自然と人間との共生を可能ならしめると考えられる。

(28) 『「マ」ス倫理学』9-10 1171a. (日本語訳は高田三郎訳『形而上学』岩波文庫、1985 による。) また同 9-11 1171b に「愛は自他の共同 (koinonía) なのである」と言う。つまり自然と人間との共生は愛の働き以外にはなく、その両者の間の倫理学が構築されなければならないであろう。

(29) 『旧約聖書』は次のように言う、『神はまた言われた、「われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り、これに海の魚と、空の鳥と、家畜と、地のすべての獣と、地のすべての這うものとを治めさせよう」。神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。神は彼らを祝福して言われた、「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ。

また海の魚と、空の鳥と、地に動くすべての生き物とを治めよ」。神はまた言われた、「私は全地のおもてにある種をもつすべての草と、種のある実を結ぶすべての木とをあなたがたに与える。これはあなたがたの食物となるであらう。また地のすべての獣、空のすべての鳥、地に這うすべてのもの、すなわち命あるものには、食物としてすべての青草を与える」。そのようになった。』『創世記』第1章 26 - 30

短期大学生活科学科